井上靖

暗い平原
ある偽作家の生涯

ある偽作家の生涯　暗い平原

井上靖

新潮社版

ある偽作家の生涯・暗い平原

〈井上靖小説全集4〉

昭和49年7月20日発行
昭和51年10月30日2刷

定価 950円

© Yasushi Inoue, 1974,
Printed in Japan.

著者 井上靖
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一 電話・業務部(〇三)二六六一五二一一、編集部(〇三)二六六一五四一一 郵便番号・一六二 振替・東京四―八〇八
印刷所 二光印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

ある偽作家の生涯　五
暗い平原　三七
夜明けの海　九五
斜面　一一六
ひと朝だけの朝顔　一三七
三ノ宮炎上　一三九
古九谷　一五五
秘密　一五七
ある自殺未遂　一六二
ある愛情　一七八
七夕の町　一八八
鵜　一九九

薄氷　二〇八
楼門　二一九
春の嵐　二三二
貧血と花と爆弾　二三四
北の駅路　二六二
小さい旋風　二七四
楕円形の月　二九〇
千代の帰郷　四〇三
仔犬と香水瓶　四一五
夏花　四三五
自作解題　四五四

装画　加山又造

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

井上靖 小説全集 第4巻

ある偽作家の生涯

日本画家大貫桂岳伝記編纂の仕事を大貫家から依嘱され、それを引き受けてから今日まで十年近い歳月が経過しているが、未だに私はその約を果していない。今年の春、京都の同家から、桂岳の十三回忌を禅宗の某寺で行なうという出席可否を報ずる返信葉書のついた印刷の通知状を貰ったが、正直のところちょっと大貫家の人々に顔を合せにくいようなその時の私の気持であった。その十三回忌には幸か不幸か仕事の関係で出席できなかったが、出席できないことで、むしろ救われた吻とした思いが動いたことは事実であった。

昭和十七年頃だったと思うが、最初大貫家の嗣子卓彦から桂岳の伝記編纂の仕事の交渉を受けた時の、先方の条件は、別段急がないけれど、七回忌には故人の霊前にも供え是非参会者にも頒けたいから、それまでに出版できるように脱稿して貰いたいという話であった。その七回忌というのが、終戦の二十年の三月に当っており、私にも大貫家にも桂岳の伝記どころでないあわただしい生活がその前後に置かれてあったわけで、従って私の伝記編纂の仕事も資料蒐集の段階で一時中止の已むなきに至り、この約束も自然解消の形を採ったのであった。ところが戦後改めて大貫家から再び交渉があり、時代も落ち着いたし、いつまでも放置しておくわけにも行かないので、早急に伝記を完成してくれないかということであった。そしてそれから今日までに、大体年に一回ぐらいの割で、卓彦から伝記編纂の進捗状態についての、いかにも彼らしいそれとない問合せの葉書を貰っており、その度に私は、その場限りの苦し紛れの返事をして、一時を繕って来たわけであった。

そもそも私に桂岳の伝記編纂の厄介な仕事の白羽の矢が立ったということは、当時私が大阪の某新聞社の美術記者をしており、仕事の上で故人とも何回か面識があり、故人も他社の記者よりも私に好感を持っていたようで、そんな事情もあって、資料の蒐集にも比較的便利であり、画壇の知識も多少持ち合せている美術記者としての私の立場が買われたらしく、大貫家の遺族や門下生の間で、最適任者として私が伝記編纂の担任者として選ばれたようであった。

この話を受けた時、私が二つ返事でこの厄介な仕事を引

き受けたのは、大貫桂岳の人柄も作品も好きであったし、それに何より桂岳の伝記を編纂するということは、彼を中心にして京都画壇史、というよりも日本画壇史を書くようなもので、これを機会に一応美術記者として明治以降の日本画壇の変遷推移を勉強しておくのも決して悪いことではないと考えたからであった。

しかし、簡単に引き受けてはみたものの、これは私が考えたほど容易な仕事ではなかった。先ず手初めに年譜の作成に着手したのであるが、晩年の京都の豪壮な邸宅を構える前は、桂岳は気分の赴くままに転々として京都市及びその近郊だけでも十カ所以上居を変えており、また一年の半分近くを旅で送っている状態で、世に喧伝された名作や大作も、どこのアトリエで何時制作されたものであるかさえも、なかなか正確には摑み得ない状態にあった。まして彼の六十余年の生涯の行動の軌跡を辿って行くということは、何人かの画家や門下生、画商、表具屋、所蔵者等の話を綜合してみる他なく、しかもそれぞれの話がまちまちと来ているので、外部から考えるような簡単な仕事ではなかった。

それに桂岳は五十歳の時糟糠の妻みつ女を喪っており、以後桂岳より二年遅れて物故した年老いた女中と書生との三人暮しが続いていた。しかも書生の方は桂岳が気難しいため長く居附いた者はなく絶えず交替していた。一番よく故人の動静を知っているべき筈の嗣子の卓彦が又長くフランスで暮し、桂岳が歿する五年程前に帰朝してはいたが、東京で別に家を持って、いかにも我儘者の彼らしい父への向い方で、殆ど生前の桂岳の生活に触れていなかったので、桂岳の私生活については詳しい知識を持ち合せている者は殆どないと言ってよかった。それにもう一つ加えて、桂岳の不羈奔放な野人的性格から拠って来たることであるが、彼には常に画壇というものを白眼視しているようなところがあって、画壇的には終始一貫孤立派として過したと言ってよく、それがために彼の伝記資料の蒐集は到るところに大きい困難と支障を伴った。

それやこれやで、伝記の基礎となるべき年譜の作成さえも捗々しく進捗せず、極く初期の作品を、彼の出生地に近い瀬戸内海沿岸の町々を訪ねたり、晩年の鑑賞画（売画）の大作を、どういうものか不思議に桂岳愛好者が集まっている北陸の小さい織物町に見に行ったりして、僅かにノートを二、三冊つくっただけで、そのうちに戦争が烈しくなると共に、桂岳の伝記編纂の仕事は、基礎調査半ばにして打ち切られて仕舞ったのであった。

戦後は私には、この仕事は一度腰を挫かれた妙な億劫さが先に立ち、引き受けてある以上取りかからねばならぬと思いながら、その仕事の特殊な煩瑣さも知っているだけに、

おいそれと腰を上げる気持にはなれなかったのである。それに肝心の私自身が、戦後、自分でも思いがけず新聞社をやめて、東京に出て、文学の方へ頭を突込むようなことになり、絶えずその方の仕事に追われ勝ちで、それやこれやで桂岳の伝記の仕事は未完成の至るところ空白だらけの年譜と、二、三冊の断片的なノートのままに、一日延しに今日まで放置しておく結果を招くに至ったのであった。

事情は以上のようなものであるが、それにしても、十三回忌にさえ伝記が間に合っていないとなると、私としては大貫家に対してもまた故人に対しても、いったん引き受けてそれを延し延しにしてある手前、ちょっと顔向けの出来ないものがあり、その回忌の通知を眼にしてから、今年とそは何とかして、たとえ形だけでも、伝記の仕事に恰好をつけ、その責の一半を果して吻としたい気持があった。

そして七月八月と暑い盛りは、どうせ自分の仕事の能率も上らないのが毎年の習わしであるので、私はこの暑中の二カ月を桂岳の伝記編纂の仕事に当てる予定を立てて、そのために郷里の伊豆の天城の麓の山村に、小さい仕事場を持ったのであった。私は毎日午前中だけを、この仕事に当てて、不明なところは不明なままにしておいて秋にでも京都へ行ってそこを埋めることにして、とにかく一応脱稿して仕舞おうとやや強引に仕事に取りかかったのであった。

仕事は七月の間はまあ順調に進んだと言ってよく、十冊近い随筆集や紀行文に眼を通して、判明しただけの旅行、その年次の主要作品などの書き込みも終って、一応蕪雑ながら桂岳の年譜を作成し終ることが出来たのであった。そして八月に入ってからは、なるべく信拠し得る事実だけを配列して臆測を避ける執筆態度で、古いノートを参考に、伝記の幼時から青年期の分までを脱稿、京都の片倉逸草、吉水雅鳳等に相次いで師事し、明治三十年絵画共進会に出世作「失楽」を発表して褒状を受け、これを契機として、ちょっと比肩するもののない華々しさで天才作家としてスタートし、初期の「白夜」「老狐」「薄雪」等の名作と称せられるものを相次いで発表して行く辺りまで書いて行ったのであるが、ここまで来て、私の筆は突然止って仕舞ったのであった。

青年桂岳の絢爛たる芸術家としての開花期の叙述に当って、私は桂岳の唯一の自筆資料とも言うべきこの期の未発表の日記の内容をそのまま処々に挿入していたのであるが、その日記というのは、戦後初めて京都の大貫家を訪ねた時、大貫卓彦から、「ちょっと珍しいものが見附かったので、何か参考にならないかしら」

と言って手渡されたもので、和紙に細字で明治三十年の暮から三十二年の夏までの日々の出来事が、断片的な覚書

風に書き記されたもので、当時の桂岳を知る上には、唯一無二と言っていい貴重な資料であった。大貫家では、これを疎開の時、倉の中にある支那鞄の中から種々雑多な反古類と共に発見したものであるということであった。

私はこの日記の中で最も興味深く感じたことは、生涯本当の意味で一人の友達も持たなかったこの天才肌の傲岸不遜な画人が、この期に篠崎という一人の友を持っていたということである。この篠崎という名は三カ所出て来る。しかもこの篠崎という名はこの日記に出て来る家人以外の名の唯一のものであった。「銀牌を携えて北野に篠崎を訪う、徹宵酒を酌みて快談」という箇所が一つ。——これは京都絵画協会展に「孔雀図」を描いて特別賞状を獲った時であることは、前後の文面からほぼ確実である。恐らく彼は賞品の銀牌を携えて行って、その悦びを親しい友と頒け夜を徹して酒を酌み交したものらしく、青年桂岳の最も得意な一夜であったことは想像に難くない。そうした悦びを遠慮なく頒っているところから考えると、この篠崎某はよほど桂岳と親交あった人物と見なければならない。

次に「祝いに篠崎より鯛一尾を贈らる。直ちに篠崎を下立売に訪うも留守、部屋の襖に大書して帰る」というのがある。これも恐らく、展覧会か何かで入賞してその祝いに篠崎某より鯛一尾を贈られ、急にその友情に刺戟されて篠崎をその家か下宿に訪ねたものと思われる。〝襖に大書して帰る〟というのは、何を認めたか不明だが、来意を告げたか、祝い物を贈られたことに対して、彼が後年よくものした漢詩でも即興的に書き記して謝意を表したかしたものであるらしく、甚だ乱暴な話であるが、如何にも天才画人桂岳の若い日の面目躍如としていて私には興味深いものがあった。これは何月何日とも認めてない。

最後にもう一カ所篠崎という名前の出て来るところは、「篠崎生山を朝立ちして来洛」とある。これは日記の最後の方で、明治三十二年の夏八月三日の日附がある。ただそれだけのことが挿入されてあるだけで、この一行は前後と無関係でこれに特殊な意味があろうとは思われぬ。しかしこの生山という文字を見た時、この時初めて私には桂岳の親しい友であったらしい篠崎某なる人物が、突然偽作家原芳泉としてはっきりした映像を以て脳裡に浮び上って来たのであった。

私は原芳泉という桂岳の偽作を書いて暗い不幸な生涯を送った一人物について、多少の知識を持ち合せていたが、この瞬間まで半ば忘れていたこの人物が、若い日の桂岳の殆ど唯一と言っていい親しい友篠崎某であるに違いないと知った時、何とも言えない異様な感慨に打たれたのである。

勿論この時思い出したのであるが、原芳泉はそう言えば、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

養子であったと聞いた記憶があるし、実家の名前は聞いたことはないが、原芳泉の郷里である中国山脈の山中にある日野川に沿った小さい部落には篠崎という苗字がやたらに多かったことも併せ思い出され、篠崎某と原芳泉が同一人物であることは最早私には疑い得ない事実として受け取れた。

私は二日程、大貫桂岳の伝記の記述の筆を投げて、南向きの縁側の籐椅子に腰かけたまま、急に陽の光の弱くなった晩夏の天城の山肌に視線をやって無為に過して仕舞った。ともすれば天才画家桂岳の輝かしい若き日の肖像より、原芳泉の数奇な生涯が――勿論それはその時初めて彼に関して私の持っている断片的知識が一つの脈絡をもって一人物の生涯の映像として浮び上って来たものであるが――私の思いを奪い勝ちであった。私は原芳泉について何か考えなければならぬ強い衝動を感じて山肌に顔を向けていたのである。何か彼のために考えてやらずにはいられないものが、原芳泉の生涯にはあるようであった。

私が初めて原芳泉の名を知ったのは、昭和十八年の秋で、大貫卓彦と二人で桂岳の初期の代表的作品の何点かが、彼の出生地が近い関係で兵庫、岡山両県下の内海寄りの諸町村に散らばっているので、一応それに眼を通すために出掛けた時であった。

私たちはその時五日程の予定で、明石、加古川、高砂、姫路、飾磨、相生、和気、西大寺といった順序で、桂岳の作品の愛蔵家の家々を訪ねたものであった。卓彦からそれぞれの家へ前以て一応訪問の用向きを通じてあったので、私たちは大抵の家で款待を受け、名ばかり聞いていてそれが如何なるものか知らなかった桂岳の二十年代の作品の何点かを眼に収めることが出来たのであった。

私たちはかなり忙しく汽車に乗ったり降りたりして、その地方特有の白っぽい砂地の上に秋の陽の散っている、何処となく海に近い感じの播磨、備前の小さい駅々に降り立っては、ノートに書き込んである生前の桂岳の謂わばパトロンであった旧家、素封家を一軒一軒経廻ったのであった。スケジュールの関係で、ほんの一、二時間の予定しか取ってないところもあって、それでなくてさえせっかちな大貫卓彦と長い松林の道や築地の続いている町々などを半ば駈けるように歩いたものであったが、体が軽く汗ばむ程度の晩秋の、こうした旅には持ってこいの暑くなし寒くなしの気候であった。

私は作品を見ることがこの旅の主目的であったが、卓彦は、生前の父の有力な後援者の家々を御礼廻りしていといった恰好で、どの家でも一つや二つ若き日の桂岳の逸話

なども聞かされ、時には箱書のない作品に新しく箱書を書かされたりしていた。父桂岳に似て負けず嫌いの気性が、眉の太い毬栗頭の顔に現われている卓彦は、

「ちょっといけましょう」

などと言って、彼の言葉によれば〝巴里でしたい放題のことをして艶名をとどろかせた男〟に似ない骨太の腕を捲りあげて、驚く程父桂岳に似た字を書いてみせたりした。

私はこの私と同年配の桂岳二代目と初対面の時から不思議によく気があって、短い期間のうちに、ざっくばらんな交友関係を作っていた。外国で放蕩もしつくして日本へ帰ってからは遊ぶのが莫迦らしくなって、急に人物が変ったように見栄も外聞も構わなくなり、戦時下の荒れた日本を一人の異邦人として横目で睨んでいるといった風なところがあり、天才の二代目らしい人を喰った不敵なところと良家のお坊ちゃんとしての人のよさを彼は併せ持っていた。彼に会うまで私の耳に入っていた風評は、実際とは驚く程懸け離れていた。知名な画人の二代目としての誤解だけが彼を取り巻いているようであった。

彼は父から非凡な芸術的才能を受け継いでいたが、世間からは怠惰な無能者としての風評を得ていたし、洒落っ気も構えも薬にしたくもなかったが、彼は気障な道楽者として噂されていた。尤も父譲りの莫大な財産と豪壮な邸宅や別荘を受け継いでいたので、本業はまあ彫刻家と言うべきであったろうが、実際には何もしていなかったし、何もする必要もなかった。謂ってみれば、戦争に敗けて仕舞わないうちに親父の伝記を作り、豪華な遺作集でも造ることが、彼のさしずめ為さなければならぬ仕事のようであった。

そうした大貫卓彦とのその五日間の旅に於て、私たちは全く思ってもいなかった一つの興味ある事実にぶつかったのであった。それはどこの家にも大抵一点ずつ、申し合せたように桂岳の偽作が所蔵されてあることであった。

初めて私たちが桂岳の偽作に出会ったのは、加古川の、当主の既に亡くなっているMという素封家に於てであった。

手入れのよく行き届いた中庭に面した奥座敷で私たちは何本かの桂岳の作品を見せて貰ったが、その中の一本である箱書に「洛北秋景」とある小品の、茶掛け風の軸を展げて行った瞬間、私には直ぐそれと判ったが、横から覗き込んでいた卓彦の視線も直ぐ私の方に来て、思わずぶつかった二人の眼はそこでちょっと絡み合った。

「どう？　こりゃあ」

と、彼の眼は言っていた。私の方は全くこれと同じ作品で京都の或る所蔵家が持っているものを知っていたのであるが、彼はそうした事とは全く別に画面に画品というものがなかったことからぴんと来たらしく、彼は後でその時の

ことを私にそう説明した。ともかく明らかにそれは展観目録か何かの写真を見て、桂岳の作品を模して描いたものであった。私たちはその場で念のために桂岳の印譜を開いてそれを検べたが、石の印の「滴心亭」も明らかに模造の木の印を使用しているらしく、一見上手く似せてはあったが、較べてみると二つの間にははっきりと相違があった。それに使用してある印肉も違っていたし、ちゃんと箱書までしてあったがこれも勿論偽筆であった。

訊いてみると、亡くなった当主が現在はどうしているか知らないが、その当時一時加古川に住んで古いものを持ち歩いていた原芳泉という桂岳の友人である日本画家から手に入れたもので未亡人もその男に面識があるということであった。すると、それを聞いた卓彦は、

「原芳泉ですか、その男は私も知っていますよ。いつだったか、とにかく小さい時に二、三回会った記憶をもっています。確かに親父の友達で家へ出入りしていた男ですが、その後親父の偽作をして親父から出入りを止められたとかいうことを耳にしたことがありますが、やはり本当だったんですな」

と言った。

この加古川のM家の場合を皮切りに、私たちはそれから連日のように原芳泉画く桂岳を行く先々で見せつけられた。

「これも原桂岳だね」

「なかなか上手いじゃないか、これなど本物そこのけだ」

私たちはそんな会話を交して、所蔵者には気の毒であったが、それが偽物であることをその度に告げた。中には一見して直ぐそれと判る偽作もあったが、時には驚く程精巧に似せて描かれている作品もあった。偽物である以上、画品、画格の上で明らかに本物の桂岳の作品とは鑑別できるわけであったが、それ以外でも仔細に検討すると、どこかにやはり大きい手落ちがあった。

桂岳は中期以後絶対に岩石の肌の草や苔などの描写に当って、白緑の点描を使わなかったが、そうしたところに一目でそれと指摘できる誤謬があったり、又桂岳が好んで描く夏富士の白雪の下部の群青の特殊な使い方に、明らかに偽物を証拠立てる拙劣さが見受けられたりした。必ず偽物は偽物としての本性をどこかに暴露しているのであった。

私たちの見た偽作はその全部がその入手経路からして原芳泉の筆になったものであった。大体この原という人物は余程器用な男だったらしく、作品は勿論のこと、落款、印、それから箱書まで自分自身で受け持っていると思われる場合が大部分で、私たちがこの旅で十何点か見た偽作の中で僅か二点だけが、田舎のいんちき画商と組んでやった仕事かと思われた。

と言うのは、大貫桂岳と親交を持っているということが、いつも買手に対して使っている彼の切札で、それに依って相手を信用させ、その上で桂岳から貰ったものだとか廉く買ったものだとか言って、偽物を売り附けている場合が多かった。又中には桂岳に揮毫を依頼してやると言って、適当な期間をおいて相手に作品を持ち込んでいる場合もあった。

正体の判らぬいんちき画商が中に立ったものは、前述の如く僅か二点であるが、それにしても芳泉が一時期悪辣な画商と組んで偽作の仕事もしたことはこれに依って明らかで、同じいんちき仕事でもこうなると悪質だった。

私たちはその旅で、この偽作家原芳泉を、原桂岳とか、原のおっさんとか呼んだものである。私たちは十何点かの彼のものする偽作にお目にかかり、所蔵者たちの話から芳泉についての断片的な知識を得たが、それらはみな四十代と五十代の芳泉に関するもので、彼が無名の町絵師としてこの地方を転々として居を変えていた時代のことであって、果して若き日の桂岳と如何なる程度友達づきあいをしていたかは、卓彦が持っているうろ覚えの記憶から推測する以外仕方がなかった。

原芳泉から偽物を掴まされた被害者たちの話を綜合してみると、相生に三年、飾磨に二年、和気に四年というように、彼は私たちが訪ねた内海沿いの小都市にそれぞれある期間住んで居たが、しかし五年と長くは一カ所に落ち着いてはいなかったようである。思うに偽物を売り歩くくらいの男であるから、二、三年経つと結局は何かの事件で一つの町を食いつめて居たたまらぬようなことになり、他に転ずるの已むなきに至ったものと思われる。しかし常に近接する小都市を転々としていて、遠く離れることのなかったのは、桂岳愛好家の多いこの地方を棄てては生活が成り立たなかったためであろうか。

芳泉は、和気のある酒造会社の社長をしていたSという人物以外に、彼の妻を紹介していない。どういうものかこの人物の家にだけは芳泉は小柄だが美人の細君を連れて何回も訪れて居り、S家の先代には驚く程の信用を博していたという話であった。

「芳泉は自分で絵を描くというより画商のようなことをしていたのではないかと思うんです。子供の時だからよく覚えていませんが、親父がよく東京の画家に絵を依頼する時など、芳泉に頼んでいたようでした。家にあるものの大部分は芳泉の世話ではないですかな」

と、そこの、絵には余り関心を持っていそうにない大学時代有名なラグビーの選手だったという四十年配の今の主人は語った。

「何をやっても器用な男だったと思うんです。篆刻なども
やっていましたからね。家に確か芳泉の彫ったものがある
筈です」
それからそれを探してくれたが、何処に入って仕舞った
ものか見附からなかった。
私たちは、芳泉の世話でこの家の先代が手に入れたとい
う東京の知名な画人たちの作品の何点かを見せて貰ったが、
この方はいずれも正真正銘な本物で、中にはよくこんな田
舎へ手離したと思われるような、小品だが一寸珍しい程の
力作もあった。この事から推して考えると、芳泉は一面で
は東京の画人間には相当の信用を博していたものと思われ
る。
「要するに芳泉は桂岳専門なんだね。しかも慎重に立ち廻
って、一軒の家へ二本とは売り附けるようなことはしてい
ないな」
と卓彦は言ったが、実際にその通りであった。なかなか
抜目のない利口な男だったかと思われる。
私たちの調べたところでは、どういうわけか芳泉は加古
川にだけ前後二回に亙って住んでおり、二回目の時は五十
代も半ばを越していたらしく、昭和二、三年の、その二度
目の加古川住まいを最後にして、彼はこの地方から姿を消
しているようであった。姿を消しているというより、要す
るに彼はこの頃からこの地方の美術愛好家の所へ姿を見せ
なくなっているのである。
この旅の最後の五日目は、私たちは西大寺から引き返し
て、姫路の海岸近くの小さい名の知れている旅館に宿を取
った。少し落ち着いて新しい魚でも喰べて五日間の旅の疲
れを癒そうという二人の心組みであったのである。ところ
が、不思議なことに、その旅館の私たちの通された座敷の
床に偶然にも私たちは芳泉の描く山水を発見したのであっ
た。落款にははっきりと読める楷書に近い書体で「芳泉」
と書かれて「寒古亭」と「芳泉」という印が二つ捺されて
あった。
私たちは旅の疲れもあったためか、この芳泉の作品との
奇妙な邂逅が無性に可笑しく感じられた。
「いやに芳泉画伯と縁があるね」
と卓彦は言った。
「こんどは覆面を取ったじゃあないか。まさかこれは自分
の偽物ではあるまい」
そんな無駄口をたたきながら、二人ともその座敷に通さ
れたばかりの立ったままの姿で、床の軸に見入ったものと
あった。実際に、私たちは芳泉描く偽桂岳には何点かお目
にかかっていたが、芳泉がちゃんと自分の名を署名した彼
自身の作品を見るのはこれが初めてであった。

「満更悪くもないじゃあないか」
ちょっと意外だといった顔をして、
「文展無鑑査ぐらいには行くな」
と卓彦は言った。実のところよくそこらの宿屋の床の間に発見する誰が描いたか判らないとんでもない作品の類とは、少なくともそれは異なっていた。題材はありふれたもので、霧に包まれている高山の一角を南画風に描いたものであったが、芳泉と自分の名を署名するだけあって精密に描き込んであって、見ていると妙に心に滲み込んで来るものがあった。
「変な精神があるな」
とその時卓彦は言ったが、確かに画面には変な精神と言えるようなものがあった。桂岳の何点かの名作を見て来た眼には勿論それが佳品として映ろう筈はなかったが、妙に貧寒孤独な精神が、これはこれで作品をきびしくしていた。それから暫くしてから、
「なるほどね、寒古亭か」
と感に堪えぬように言って、卓彦はもう一度画面を覗き込み、それから縁側の籐椅子の方へ行ったが、その寒古亭と言う言葉の響が、それを聞いた私の心にも、その時妙に作品の持つものとぴったりした感じで冷たく伝わって来たものであった。

その晩、私たちは何本かの銚子をあけて旅の最後の夜を過した。そして一週間がかりで調べた桂岳の初期の名作の話より、話はとかく原芳泉のことで弾み勝ちだった。
曲りなりにも、これだけの絵を描くのだから、芳泉は満更才能を持っていないわけではないというのが二人の到達した結論であった。
「莫迦な奴だな。親父の偽作なんてつまらないことをしていないで、自分の作品を描けばいいじゃないか！」
卓彦は横眼で床の軸に眼を遣りながら、浴衣の腕をまくり上げて、盃を口に運んだ。
「偽作の方が売れたんだろう」
「そりゃそうだ。寒古亭より滴心亭の方が売れたんだ」
「一体どんな男なんだろう。覚えていない？」
私はこの偽作者に多少の好奇心を感じたので、如何なる風采の人物かを知りたかった。
「全然覚えていないんだ。小さい時のことだし、それに玄関かどこかでちらっと見ただけだからね。尤も一回は、そうだね、親父が四十ぐらいの時の事かな、僕が七、八つぐらいだったろうから。——」
と、卓彦は彼の記憶の中で、一番深く印象に残っている時のことを語った。
場所もどこか全然はっきりと記憶していないが、何でも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c